

産業遺産紹介 IH-CSIH-041

三雲の装荷線輪用櫓

所在地：滋賀県湖南市三雲

装荷線輪用櫓とは、1928年に東京・神戸間に日本初となる長距離市外電話が開通したときの施設の一つである。

日本の電話方式では、1889年に裸架空線による東京・横浜間の通話を嚆矢とするが、遠距離になるほど音声が減衰し通話距離に限界があった。それを解決したのが装荷ケーブルと真空管中継機であった。このとき、東京・神戸間約610kmには、およそ80kmごとに真空管中継器を備えた電話中継所を建て、各中継所間には約1.8kmごとに音声電流の



〔写真1〕三雲の装荷線輪用櫓（2016/06/30 筆者撮影）

減衰防止のための装荷線輪（櫓のほか地下施設もある）が設置された。

紹介するのは、かつての亀山中継所と京都中継所間の現JR草津線の三雲駅（滋賀県湖南市）近くに残る装荷線輪用櫓である。草むした地に鉄筋コンクリート製の4本柱の背の高い構築物がぼつんと立っている。簡易実測では、柱の下部寸法は360×360mm、柱内の間隔は東西方向が約3300mm、南北方向が約2400mm。装荷線輪を載せるプラットフォームと呼ばれる床面があり、寸法、形状とも豊川市や豊橋市にも残る装荷線輪用櫓（豊川市のは国登録文化財）と近似している。

（天野武弘）



〔写真2〕google mapより作成（2016/07）

中部産遺研会報 第63号 目次

1. 産業遺産紹介／天野武弘	1
2. 海外の海事博物館めぐり（8）／杉本漢三	2
3. 丹波マンガ記念館／安見 脩	4
4. 第24回総会・第140回定例研究会の概要／柳田哲雄	5
5. 第141回定例研究会・第3回さんぎ大学案内	9
6. 第3回全国風穴サミットin信州上田案内	9
7. 第142回定例研究会・見学会案内	10
8. 事務局より、編集後記、原稿募集	10

海外の海事博物館めぐり(8)

香港大空博物館／香港科學館

The Space Museum and Hong Kong Science Museum

杉本漢三／SUGIMOTO, Kanzo

キーワード；香港大空博物館、香港科學館、マカオグランプリ博物館、DC3型旅客機

1. はじめに

大空博物館とは、航空宇宙博物館のことである。香港市内を流している安いマイクロバス(3香港ドル＝45円)を利用して「香港科學博物館」で降ろしてもらい、そこに併設している別料金の「大空博物館」へのチケットを買う。科學博物館に間借りしているような雰囲気の「大空博物館」であり、その両館の境界がよく分からずに二重の入館料を払って見学した。

まず、入館するなり、Cathay PacificのDC-3型旅客機(図2；現地名「貝茜号」)が迎えてくれる。まさにこの香港のエアライン会社の看板機であるが、このDC-3型はこの売りでもある。この輸送機は、航空史上空前で絶後の大量生産した航空機で、第二次世界大戦終結までに約1万1000機生産した。この平和の翼で勝てないと諦めたボーイング社は四発の重爆撃機B17やB29の開発へと大きくかじを切ったという。館内散策しているうちに自動車用エンジンの展示もあったが、もう一つの売りは「オートジャイロ」が体験できることであろう。それでも1000円ほどの高い別料金をまた払わなければならない。だから地元の学童たちには無理で欧米人が多く体験していた。



〔写真1〕 夕暮れの香港科學館の全貌
(2000年3月30日、筆者撮影)

2. 館内の様子

中国の科学博物館というより、大英帝国のものらしき博物館と想定して入館した。しかし、中国も技術力で何とか先進国に追いつこうと科学博物館に必死になっている様子がそれとなく伺えた。だから小・中学生などが理解できる程度のレベルに合わせた展示、解説が多かった。館内の展示ブースで「早期的推進系統」というのが分からなかったが、「宇宙ロケット」のことであり、この原理から宇宙への打ち上げなど学童にも夢を持たせ、理解できるようにうまく解説していた。

しかし、現地人より欧米人の観客が多い科学博物館と感じた。香港人にとって航空宇宙博物館は市民生活からかなり隔離されている現状とみた。そういう日本人も国内の航空宇宙博物館に足を運ぶ人は至って少ないようだ。

3. ダグラスDC3型輸送機

私にとってはDC-3機が気になったのは、アイゼンハワー元帥の言葉である。『バズーカ、ジープ、原子爆弾、DC-3型機が第二次世界大戦の勝利を決定付けた』といった法螺のような発言であった。だが、私はDC-3機ではなく、ドイツはB17重爆、日本はB29重爆などそれぞれボーイング製の四発重爆機に徹底的にやられたからと思っている。日独が敗戦に至ったのは、B17とB29の両爆撃機であってDC-3型輸送機で



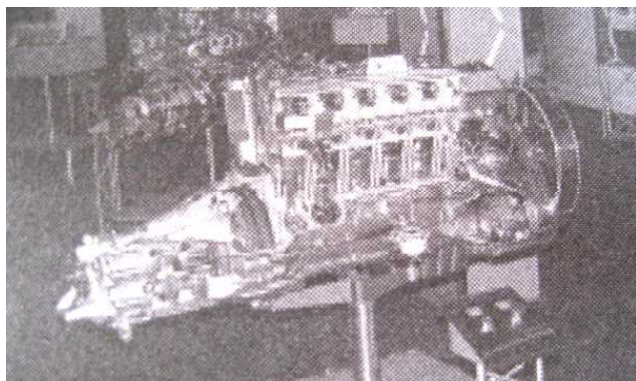
〔写真2〕 DC3旅客機 (2000年3月30日、筆者撮影)

はない。

ダグラスDC3型輸送機／旅客機は、1933年(昭和8)に初飛行したが、最終型DC-3型は、1935年の就航であり、1940年代の第二次世界大戦中では、アイゼンハワーが言うような戦績はなく、ダグラス社はこのDC3型を基にした爆撃機(XB18/XB19)を開発進めたものの、軍の要求を満たせることはできなかった。もっぱら、ボーイング社等のB17、B24、B25、B29などの爆撃機が勝利を決定付けたのではなかろうか。

残念ながら、技術力の劣った日本はこれらのターボエンジン付きや与圧式機内の爆撃機を設計、生産できず、さらにこれら米爆撃機を邀撃できるような戦闘機すらほとんどなかった。

軍用機を諦めたダグラス社は、戦後、ボーイング社の707ジェット旅客機に対抗すべく、DC8型を707より11カ月も早く1958年11月に初就航させた。日本航空(JAL)は、過去において手堅く、ほとんど失敗作の無い保守的なダグラス社のDC8型を大量採用した。しかし、巡航速度がわずかに勝れ、貨物積載量の大きかった707にシェアを奪われてしまった。さらに、1974年には、DC10型エアバスの大事故で姿を消していった。



〔写真3〕 自動車用FRエンジン群の展示。中国製エンジンは無く、すべて海外輸入車用のものばかり。
(出典：博物館パンフレット)



〔写真4〕 オートジャイロの体験設備
(2000年3月30日、筆者撮影)

4. マカオ・グランプリ博物館

香港の博物館見学に出かけたら、すぐ隣のマカオに足を運び、日本と関係の深い「マカオ・グランプリ博物館」を観ていただきたい。モナコ同様に、マカオの市街地の道路を利用したレーシングカーによるカーレースは世界的に有名である。このレースを記念して1993年に開館したのがこの博物館である。レーシングカーのみならず二輪車も多く展示しており、日本人ライダーとヤマハのバイクも展示してある。ここで特筆すべきは、1962年11月の第9回マカオ・グランプリで日本が初めて「三菱500」で優勝(1位～2位)したことである。空冷直列2気筒OHV-611ccエンジンながら、28ps/4800rpm、最高速度125km/hで183kmのコースを2時間10分で完勝した。



〔写真5〕 マカオ・グランプリの優勝者と「三菱500」
この実車のうち1台は「三菱オートギャラリー」(愛知県岡崎市、三菱自工社内)に展示中。

5. あとがき

「大空館」と言っても、航空宇宙博物館と期待して見学しない方がよさそうに思える。中国大陸は、まだまだ航空宇宙技術から遅れていて、模倣技術で戦意をのたまっているが、艦上戦闘機や爆撃機の航空博物館はいまだ姿を見せていない。

蒸気機関やディーゼルエンジンについては、「香港鉄道博物館」を観に行くとよいだろう。また、グローバル的な博物館を目指した「香港海事博物館」も開設している。

〔参考文献〕

1. 「香港・マカオの博物館」中村浩著、芙蓉書房出版、2012. 12. 20刊
2. 「人間航空史」佐貫亦男著、中公新書370、昭和49年8月25日刊

※香港科学館URL：

http://hk.science.museum/en_US/web/scm/index.html

【短信】

丹波マンガン記念館見学記

安見 脩 / Yasumi, Osamu

京都市街の北西部から北へ向け、高々と聳える北山杉山中を蛇行する国道162号線を走り、峠を越えて少し開けた高原地帯、丹波高地は昔からマンガンを産出することで知られている。今回は当地にある「丹波マンガン記念館・新大谷鉱山」の見学に訪れた。

新大谷鉱山は、1976（昭和51）年まで操業され、閉山後に博物館として整備されたため、府下唯一、坑道が公開され、坑内見学ができる鉱山跡である。



【写真1】マンガン鉱山記念館
(2016年6月17日、筆者撮影)

まず、記念館の屋外には、コンプレッサー、クラッシャー、トロッコ、巻上機など、鉱山機械や工具が展示されている。それぞれに詳細な説明があり、鉱山作業の様子がよくわかる展示となっていた。

屋外展示を見終えて、次に坑内の見学に入った。閉山後20年かけて整備された坑内には、鉱夫を模



【写真2】マンガン鉱山記念館の坑内の展示
(2016年6月17日、筆者撮影)



【写真3】マンガン鉱山記念館の公開坑道
(2016年6月17日、筆者撮影)

した人形が至る所に配置されていて、当時の採掘の様子が実体験できるようになっていて、感銘深い展示内容であった。また、「強制連行」の展示では、今のこどもたちには到底理解できない程過酷な毎日を送った人々の事を思い、身にしみる思いであった。また、複雑な気持ちと平和の有り難さを実感できる展示であった。

坑内見学を終えて、展示人形を制作した任静子氏（記念館初代館長李貞鎬氏の夫人）と1対1で話を聞くことができた。「今日はあなた一人だから、ゆっくりできるが、多いときは数十人の団体が重なることもある」と聞く。「また、韓国団体も多い」とも聞いたが、彼らが連行強制労働について、どんな反応を示したのか、気にはなっていたがつい聞きそびれてしまった。

任氏に別れを告げて席を立ったところ、「気をつけて運転してね」と声をかけられて、門口まで見送ってもらい、心わだかまっていたもやもやも一気に晴れる思いがして、帰路についた。

■丹波マンガン記念館

所在地：京都市右京区京北下中町東大谷32番地
休館日：水曜日
開館時間：10:00～17:00
入館料：大人1200円

■丹波マンガン記念館URL

<http://tanbamangan.sakura.ne.jp/index.html>

第24回総会 第140回定例研究会の概要

花村富雄／HANAMURA, Tomio

日時：2016年05月29日(日) 13:00～17:00

会場：大同大学

司会：花村 記録：柳田

■第24回 総会

会長挨拶 永田 宏

議長に永田会長を選出。

1. 2015 年度(平成27年度)事業報告／大橋公雄

2015年度の総会、定例研究会、シンポジウム、その他の催しなどの事業について大橋事務局長から報告があった。

2. 2015 年度(平成27年度)決算報告／朝井佐智子

2015年度の研究会決算、特別会計決算(田中基金)、シンポジウム積み立て決算について、朝井会計幹事から報告があった。また、特別会計は三菱UFJ銀行の定期預金に、シンポジウム会計は研究会会計に組み入れ(シンポジウムの)積み立て金は三菱UFJ銀行の定期預金としたことも報告された。

3. 2015年度(平成27年度)会計監査報告／植田泰司

2015年度の研究会会計・特別会計(田中基金)・シンポジウム会計・書籍会計について適正に処理されていることが植田会計監査より報告された。また、平成28年4月3日に行った監査時に「所見」として指摘された事項は、現時点ですべて処理済みであることも報告された。

上記1～3について、一括して承認された。

4. 規約等一部改正(案)／大橋公雄

職制や新設する役員などについて、規約を一部変更する案が提示され、提案のとおり承認された。

5. 2016～2017年度役員・分掌組織、役員及び分掌幹事(案)／大橋公雄

2016～2017年度の役員とその職務分掌案が提示され、提案のとおり承認された。

6. 2016年度(平成28年度)事業計画(案)／大橋公雄

2016年度の総会、定例研究会、シンポジウム・見学会などの事業計画が提示された。

7. 2016年度(平成28年度)予算(案)／朝井佐智子

2016年度の事業計画に基づく予算が提示された。

上記6及び7について一括して承認された。

8. その他

本項についての議事はなかった。

■記念講演

「日本の電気事業の変遷と産業遺産」／寺澤安正

講演の概要は以下の通りであった。

1. 日本の電気事業の変遷

1-1. 世界で初めての電気事業

1878年・エジソンの電灯会社設立から始まる米国の電気事業の黎明期から原子力発電に至る経緯についてエジソンの初期の電球のフィラメントには京都の竹が使われたことなどの例を取り上げ、京都府の岩清水八幡宮



記念講演される寺澤安正氏

境内にはエジソンの顕彰碑があることなどの説明がなされた。

1-2. 日本初の電気事業会社

1887年・東京電灯会社による日本で最初の一般供給用発電所の建設から大阪・京都・名古屋での電気事業の変遷について東日本と西日本の周波数の違いなどを例として説明がなされた。

また、このなかで、かつて光度の単位として使われた「カンデラ」は、ろうそくの英語「candle」から由来していること、福沢諭吉の「水力発電立国論」、福沢桃介の生涯や名古屋との関わり、松永安左エ門の功績などが紹介された。

2. 中部地方の電気事業の変遷と産業遺産

2-1. 中部地方の電気事業の変遷

中部地方の電気事業は、1889年・名古屋電灯会社が現在の名古屋市伏見にある「でんきの科学館」の場所に発電所を建設したのを嚆矢とする。その後、多くの電灯・電力会社が設立され、1927年には全国で761、中部地方に165の企業が存在し、大規模水力発電所の建設、高圧長距離送電の技術開発などの競争が行われたが、企業の吸収・合併により東京電灯・東邦電力など五大電力に収斂していった。戦後の1951年には電気事業再編成令が出され中部電力など9電力会社が誕生したが、現在では、電力事業の自由化により多くの電気事業者が出現している。

2-2. 中部地方の電気関連の産業遺産

中部地方の電気関連の特筆すべき産業遺産として、以下の施設が紹介された。

岩津発電所・千草発電所・旧小山発電所・長篠発

電所・八那池第一発電所・旧小里川第一～第三発電所・大井発電所・芝富発電所。名古屋市内に建設された発電所として旧名古屋火力発電所・旧名港火力発電所。産業考古学会推薦産業遺産の発電所として宮城第一発電所の水車と発電機・大井川発電所の市代吊橋。近代化遺産として読書発電所・旧八百津発電所・長良川発電所。

3. 名古屋発電所ものがたり

名古屋市内に建設された南長島町・下広井・那古野・水主町・小幡・熱田・名古屋火力・名古屋・名港・新名古屋の各発電所が紹介された。このうち、那古野と小幡は鉄道会社の発電所であったこと。また、新名古屋火力発電所は燃料の転換(石炭→石油→天然ガス)などを経て現在も稼働していることなどの説明もあった。

4. おわりに

名古屋港や堀川・新堀川・中川運河は、物流の動脈として、愛知のものづくりを支えてきた。

また、名古屋の発電所は名古屋港の埋め立てや開発とともに歩んできており、以下の特徴を有している。

①電力の需要地に近く、送電ロスが少なく効率が良いこと。

②環境に配慮し、燃料を石炭から石油、さらに天然ガスへと転換してきたこと。

③大量の冷却水として海水を得ることができること。

④後背地に、軽工業から製鉄・自動車・航空機産業など、大きな電力需要があること。

[質疑]

講演に関し、以下の質疑があった。

質問：福沢桃介は、なぜ中部地方との関わりを持つようになったのか。

回答：桃介が北海道炭鉱鉄道(株)に勤務していた頃、名古屋の石炭商・愛知石炭商会社長の下出民義と大口の取引があり、この縁で桃介は名古屋や中部地方と関わりを持つようになった。

質問：木曽川水系の発電所が、関西電力となっているのはなぜか。

回答：木曽川に規模の大きい発電所が建設された当時、名古屋には発電量に見合う電力需要がなかったため、関西方面で利用されることになり、現在に至っている。

ただし、木曽川には地元で消費される電力を想定した小規模な発電所もあり、これらの施設は、現在でも中部電力のものとなっている。

■第140回定例研究会

1. 研究報告、調査報告

[140-11-01]「中国・大連 天の川発電所専用線跡とその保存活用」大島一朗

中国・大連で廃線となっている「天の川発電所専用線」のレール悉皆調査報告とその産業遺産としての活用についての提案がなされた。

[調査施設の概要]

・天の川発電所

大連市中心部より西南約5kmに位置する石炭(1974年以降重油)を燃料とする発電所。1922年から2008年まで、稼働していた。冷却水の池は、大連初の競泳プールとして開放されていた。

・天の川発電所専用線(天の川発電所に燃料や機材を運搬するための鉄道線路)

全長1.2km、単線非電化、軌間1,435mm、レール50kg/m。

悉皆調査結果 (2015年5月 レールの側面の刻印を調査)

メーカー名	国名	製造年	調査本数	満鉄の社章有
US スチール	アメリカ	1920～1927	39	36
ベツレームスチール	アメリカ	1922	1	1
マルミツシュ	フランス	1928	17	17
ド・ヴァンテル	フランス	1928	3	3
官営八幡製鐵所	日本	1925～1933	6	5
日本製鐵	日本	1934～1938	2	
昭和製鋼所	満州	1939～1940	2	
鞍山鋼鐵	中国	1961～1965	4	
鞍山鋼鐵集団	中国	1993	1	



[写真1]大連の天の川発電所専用線跡

(2013年5月2日、大島一朗撮影)

〔産業遺産としての価値〕

- ・廃線跡に敷設されたレールに類例のない特色がある。（上記悉皆調査結果参照）
- ・多面的価値分析が可能。
- ・希少性、多様性、技術的価値、普遍的価値のコアバリューを有する。
- ・東アジアにおける重工業の自立発展の軌跡を実証できる。

欧米(USスチールなど) → 日本(官営八幡製鐵所など) → 満州(昭和製鋼所) → 中国(鞍山鋼鐵)

産業遺産としては、国産初の官営八幡製鐵所1925年製造の50kg/mレールと昭和製鋼所1939～40年製造のレールが重要である。

産業遺産保存活用に向けて2016年3月に大連市と友好都市関係の北九州市の窓口(駐大連北九州市経済事務所)経由で、大連市人民政府に対し野外博物館『大連銀河鉄道園』として保存活用を提案している。

また、TICCIH中国代表にも依頼している。

〔その他〕

大連の発電所専用線を走る石炭列車の例がビデオで紹介された。

〔質疑〕

報告に関し、以下の質疑があった。

質問：レールを調査することにより東アジアの発展の経過をみることができるといことは興味深いが他のものを調査することでも、同じようなことが言えるか。

回答：建築など他の産業遺産も、シリーズで見れば可能性はある。しかし、一箇所ですべてが明確に確認できるような事例は、メーカーや製造年が刻印ではっきり示される、レールの産業遺産以外にないと思う。これまで中国各地で約60箇所の廃線跡や駅ホームのレール柱などを確認したが、天の川発電所専用線跡のように一箇所ですトーリーが見える事例は見つかっていない。こうした意味で、天の川発電所専用線跡は突出している。

質問：今回の報告は「レールの現物を通して重工業の自立発展が実証できる。」とされたが、その意味を教示願いたい。

回答：このたびの調査では、調査地点のレールの製造所がアメリカ・フランスそして日本、次に満州、最後に中国と変遷しており、最後にレールを造った鞍山鋼鐵集団は現在も操業が続けられている。これは、それぞれの製造所で現地の人たちへの技術移転・自立発展が行われたことの証左であると考えている。中国では鞍山以外に、イギリスやベルギーなどの技術指導を受けた武漢の製鐵所（漢陽鋼鐵廠）が

あった。官営八幡製鐵所より早くレールを製造したが、現地への技術移転がうまくいかず、規格をはずれて大量の不良を出し、高炉閉鎖に追い込まれてしまった。

〔140-11-02〕「産業遺産の価値評価をめぐって」／天野武弘

産業遺産の価値評価をめぐって、以下の報告があった。

産業遺産の価値評価について、概念問題と評価基準の二つの問題が指摘されている。また、価値評価は、技術的評価を重視すべきとの考え方も示されている。

「産業考古学会」は、評価基準として歴史的基準・技術的基準・社会的基準の三つを取り上げている。1984年から87年にかけて「愛知産遺研」が行った調査では評価基準の例として、「日本の産業技術史上価値のあるもの・愛知県内で古くて価値のあるもの・当該企業にとって古くて価値のあるもの・愛知県特有の産業に関する価値のあるもの」を提示している。

報告者は2007年に産業遺産の評価の枠組みとして「歴史的・技術的・社会的」の三つの指標を提示したが、今回改めて直接的評価と間接的評価といった大きな枠組みでの考え方が示された。

その詳細は、以下のとおりである。

直接的評価(歴史・技術的評価の指標)

- ①真正的 実物や使用経歴から評価物の確証を得ることができるかなど
- ②先駆的 材料や技法が先駆的かなど
- ③意匠的 デザインや設計思想が時代を象徴しているかなど
- ④希少性 現存唯一あるいは極めて希少性が高いかなど
- ⑤構成的 生産工程などのシステムの確認ができるかなど

間接的評価(社会・文化的評価の指標)

- ①産業的 関連する産業や他産業への貢献度など
- ②経済的 関連する産業への経済的な貢献度など
- ③地域的 地場産業などへの貢献度など
- ④文化的 生活様式や文化的環境への貢献など
- ⑤景観的 ランドマーク的存在であるかなど

また、ガラ紡績機を取り上げ、評価指標の検証・適用例が示された。

〔質疑〕

報告に関し、以下の質疑(感想や提言)があった。

質問(感想や提言)

「産業遺産の評価」は、社会での価値を見出すツ

ルとなるような要素を持つ必要があると思う。また、当会からそのためのツールを発信していきたい。

「産業遺産の評価」は、物の持つ多様な価値に気付くキッカケとしてのツールあるいは指標になるのではないだろうか。

回答：その通りであると思います。

2. その他の諸報告、保存問題

〔140-21-01〕「データベース研究会」報告／天野武弘

科研費の請求申請は、認められなかった。ただし、高評価を得ていたもので、再度挑戦する。

3. 研究誌、会報(研究会ニュースレター)

〔140-31-01〕研究会誌『産業遺産研究第23号』について／浅野伸一

研究会誌の編集作業の中間報告と執筆要綱の一部を変更(投稿制限)することの報告があった。

〔140-31-02〕会報ニュースレター 電子メール版の原稿募集／橋本英樹

会報ニュースレターの原稿募集について報告があった。

4. シンポジウム・パネル展

〔140-41-01〕シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第35回／山田貢

今年度も例年と同じ時期に開催する。内容は、まちづくりに関するものなどを予定している。

〔140-41-02〕2016年度パネル展と講演会「東海の綿織物・毛織物と産業遺産」／藤田秀紀

2016年度パネル展と講演会「東海の綿織物・毛織物と産業遺産」を以下の通り行う。

- ・第12回2016年度パネル展

11月22日(火)～12月4日(日)

- ・パネル展講演会

2016/11/27(日) 13:00～ 名古屋市都市センター

5. 見学会、その他の催し物

〔140-51-01〕定例見学会／大橋事務局長

定例見学会を以下の通り行う。

場所：「新美南吉生家、半田赤レンガ建物(旧カプトビール工場)、旧中埜家住宅」

日時：平成28年9月25日(日) 午後12時45分より(荒天中止)

※頁の見学会案内参照。

〔140-51-04〕「定例研究会で見方調べ方や調査研究報告予定及び見学希望の申し出のお願い」／企画幹

事

〔140-51-05〕第3回さんぎ大学の開催／天野武弘

日時：平成28年7月24日

場所：トヨタ産業技術記念館

テーマ：煉瓦と煉瓦造建築への探訪

講師：水野信太郎

〔140-51-06〕第16回「ものづくり文化再発見!ウォーキング 名古屋西部コース」／柳田哲雄

日時：平成28年06月04日(土)

集合時刻 8:30 スタート9:00

コース：六反公園(中村区名駅南4)・LIXILショールーム・松重閘門・黒塀の小径・向野橋・黄金陸橋北の転車台・ファイバークラフト工房・旧稲本・旧松岡旅館・わらび工房・中京食品・トヨタ産業技術記念館(ゴール) 約10Km

柳田は「黒塀の小径」の説明を担当する。

6. 文献紹介、資料紹介 ()内は紹介者

〔140-61-01〕『技術・職業教育学者 佐々木享先生追悼集 人間いたるところ青山あり』追悼集 編集委員会編、大空社、4600円+税／事務局

〔140-61-02〕『産業考古学研究』2016年第3号 東京産業考古学会／事務局

〔140-61-03〕「ニューズレター」2016.5.15 No.0118 東京産業考古学会／事務局

〔140-62-01〕産業考古学会創立40周年記念「近代化遺産」シリーズ講演会を岡山市で開催

- ・第1回2016/07/16(土) 岡山県図書館多目的ホール、長崎・出島整備事業と景観の復元 櫻田美津氏

- ・第2回2016/09/03(土) 岡山県図書館多目的ホール、醸造業の産業景観ー微生物との共生・ヒトとの共生 中山嘉彦氏

- ・第3回2016/11/12(土) 岡山県図書館多目的ホール、日本とヨーロッパの歴史的造船景観に見る技術文化 若村国夫氏

- ・第4回2017/01/14(土) 岡山県図書館多目的ホール、鉱業と産業景観 清水憲一氏

- ・第5回2017/03/11(土) 岡山県図書館多目的ホール、基調講演 日本の近代水道遺産 岡田昌彰氏、シンポジウム/近代化遺産とその景観

〔140-62-02〕産業考古学会創立40周年企画「スウェーデンの鉄の産業遺産を巡る旅」

2017/08/10-23(予定)、予算35万～45万円、参加申し込み締め切り2016/11全国大会まで。

〔140-63-01〕「地方史情報」128(2016.3)、図書目録(2016)岩田書院／事務局

7. 出版広報事業

[139-71-01] インターネット

URL: <http://csih.sakura.ne.jp/>

8. 委員会、役員会、研究分科会

[140-81-01] 幹事会・役員会等／事務局

2015年度(平成27年度)

・第3回幹事会・役員会合同会議2016/04/29(金・祝) 10:00-16:00

名古屋市市政資料館第5集会室、総会準備

・監査 2016/04/03(日) 13:00-16:30

東生涯学習センター 和室

2016年度(平成28年度)

・第1回幹事会2016/05/24(メール) 総会・定例研究会のレジメ、会員の移動、会員名簿

[140-81-02] シンポジウム「日本の技術史をみる眼」
第35回 実行委員会

・第1回 2016/03/20(日) 10:00-

緑生涯学習センター 会議室

・第2回 2016/05/29(日) 10:00-

大同大学 滝春校舎本館14階 交流会室

[140-81-04] 第12回2016年度パネル展「東海の綿織物・毛織物と産業遺産」(仮)勉強会

・第2回2016/04/10(日) 14:00-16:30

名古屋都市センター13F

・第3回 2016/06/12(日) 14:00-16:30

名古屋都市センター13F

・第4回 2016/08/07(日) 14:00-16:30

名古屋都市センター13F

・第5回 2016/10/09(日) 14:00-16:30

名古屋都市センター13F

・第6回 2016/11/06(日) 14:00-16:30

名古屋都市センター13 パネル最終確認

[140-81-05] 研究誌『産業遺産研究第23号』編集委員会

・必要に応じて電子メールや電話にて開催

9. 総務・事務局関係

[140-91-03] 研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他

・第24回(2016年度)総会・第140回定例研究会

2016/05/29(日) 13:00-

大同大学滝春校舎本館14F交流会室

・第141回定例研究会

2016/07/24(日) 13:00-14:00

トヨタ産業技術記念館 ホールA

・第3回さんぎ大学

2016/07/24(日) 14:10-16:50

トヨタ産業技術記念館 ホールA

・第142回定例研究会・見学会

2016/09/25(日) 13:00-

新美南吉生家、半田赤レンガ建物(旧カブトビール工場)、旧中埜家住宅を見学

・産業考古学会2016年度全国大会

2016/11/4-6 兵庫県西宮市 大手前大学

・第143回例会/パネル展講演会

2016/11/27(日) 13:00-17:00

名古屋市都市センター

・第144回定例研究会

2017/01/29(日) 13:00-17:00

会場 未定

第141回公開定例研究会 案内 第3回さんぎ大学 案内

日時: 2016年7月24日(日) 13:00-17:00

会場: トヨタ産業技術記念館 ホールA

■第141回公開定例研究会 13:00-14:00

報告「岐阜県東部の砂防堰堤について その3」/
田口憲一、他

※『産業遺産研究 第23号』配布

■さんぎ大学 14:30-17:00

講話1 「煉瓦と煉瓦造建築への探訪」

講師 水野信太郎(北翔大学生涯スポーツ部教授)

講話2 「織機のたて糸準備」

講師 小椋岳文(トヨタ産業技術記念館 館員)

第3回全国風穴サミットin信州上田 2016/8/27(土)~8/28(日)

■8/27(土) 9:00-

第1部 ポスターセッション

ふるさとの風穴

第2部 基調講演

「蚕種風穴の歴史と再生」伴野豊・阿部勇

第3部 事例報告

■8/27(土) ミニツアー 10:00-

別所水沢風穴見学、他

■8/28(日) 現地ツアー

A. 塩田平コース B. 長和町コース

※詳細については案内参照。

第142回定例研究会・見学会案内

日時：平成28年9月25日（日）午後12時45分より（荒天中止）

集合場所：名鉄河和線「半田口」駅（阿久比駅で特急から普通に乗り換えが便利）

運賃：名鉄名古屋～半田口片道(600円)

行き電車：内海行き特急(一部指定)～名鉄名古屋(12時11分発)～金山(12時15分発)～神宮前(12時18分発)～阿久比(12時36分着)～河和行き普通へ乗り換え～阿久比(12時38分発)～半田口(12時42分着)

半田口は普通のみ停車で、次が13時12分

見学行程：

12:45 半田口駅～徒歩(15分程)～13:00矢勝川と彼岸花(20分程)～徒歩(10分程)～

13:30 新美南吉生家(30分程)～徒歩(20分程)～

14:20 軽食と半田赤レンガ建物（旧カブトビール工場）(90分程)～徒歩(10分程)～

16:00 旧中埜家住宅(60分程)～徒歩(5分程)～

17:10 知多半田駅(解散)～

18:00頃より懇親会予定(神宮前・金山)

帰り電車：佐屋行き特急(一部指定)～知多半田(17時13分発)～名鉄名古屋(17時44分着)

新鵜沼行き急行～知多半田(17時23分発)～名鉄名古屋(17時58分着)

他に見学ができるところ：雁宿公園・醸造関係(国盛酒の文化館予約制無料・ミツカンミュージアム事前予約制300円)・旧中埜半六邸・半田運河など

■事務局より

研究会の会員名簿を7月に発行予定です。

掲載事項は氏名、住所、電話、FAX、メールアドレス、所属です。変更のある方は事務局大橋公雄まで連絡してください。

住所以下の項目について掲載を希望しない方は、どの項目を不掲載とするか、連絡をしてください。

2016年度年会費ご入金お願い

1. 年会費 4,000円

2. 振込口座

銀行支店 三菱東京UFJ銀行 鳴海支店

種 別 普通預金

口座番号 1531266

口座名 中部産業遺産研究会 会計係

朝井佐智子(あさい さちこ)

※ 2016年度会費を上記口座にお振り込み下さい。

■広報幹事より

電子メールアドレスをお持ちの方で、電子メール版ニュースレターを受信されていない方は、広報幹事(hidekih@wine.plala.or.jp)まで必ずご連絡ください。

■編集後記、原稿募集

■編集後記

今号の「産業遺産紹介」は、天野武弘会員に寄稿していただきました。また、京都の安見脩会員には、短信として京都の「マンガン鉱山遺跡」を寄稿していただきました。

これからも会員の皆様の積極的な投稿を期待しています。(石田)

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見などお気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメモを貼り付けて下さい。

原稿送付先：石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp

第64号の原稿締切日：2016/09/20

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第64号（2016/10/15） 第65号（2017/01/15）

第66号（2017/04/15） 第67号（2017/07/15）



中部産遺研会報 第63号

ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.63

発行日：2016年7月15日

発行人：永田 宏

編集委員：石田正治・橋本英樹・大橋公雄・浅野伸一・野口英一朗・國立 篤

中部産業遺産研究会事務局：

〒458-0804 名古屋市緑区亀が洞三丁目1740 大橋公雄 気付

中部産業遺産研究会のホームページ <http://csih.sakura.ne.jp/index.html>

掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2016, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.